

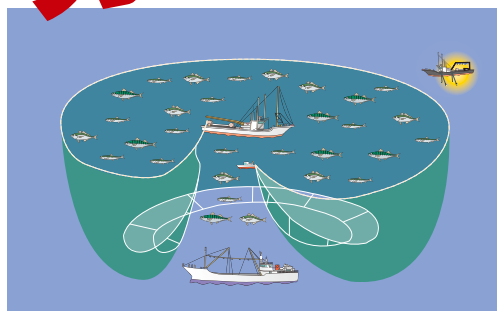
夜の海、男たちの戦い。

日本海と向き合い、大自然のふところに抱かれ、すべてを忘れて魚を獲る漁師たち。限りなく広がる海に似て、漁師たちには底抜けの明るさと何もかも包み込む大らかさがある。同じ船に乗った漁師たちは、みな家族同然だ。海の上でもともに力を出し合い、助け合い、大漁のときには同じ喜びを胸に酒を酌み交わす。そこからは、現代社会が失ってしまったひとつの世界が見えてくる。
男のロマン溢れる漁師の仕事には、生きる原点がある。

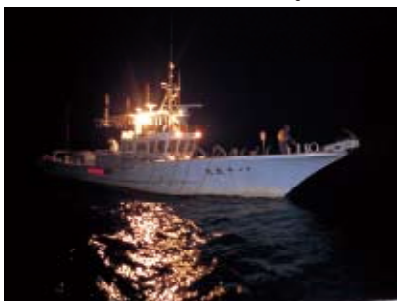
まき網漁に挑む。

まき網漁の舞台は夜の海原。日没になると漁師たちは船団を組んで漁場へと舵を取る。ハンターに変わる瞬間だ。夏場は午後7時頃、冬場は午後5時頃漁場へ向かい、翌朝、朝日が昇る頃、港へ帰る。

まき網漁は網で魚を巻き捕る漁法。主にイワシ、アジ、サバなどの回遊魚が対象だ。一つの船団は網船1隻、灯船3隻、運搬船2隻の計6隻で構成される。6人の船長のうち一人が漁労長として各船に指令を出し、船団の動きを決定する。魚の出来不出来は漁労長の感性と腕で決まる。海面温度の画像データ、魚の相場表、漁海況表、天気図など多岐にわたる情報を瞬時に分析し、自らの経験と勘を加えて指令を出すのだ。



出港から2時間。魚群発見。漁労長の指令が飛んだ。灯船がいつせいに灯火をともし、灯船は「探索船」ともいって、広範囲にわたり効率よく魚群を探す役割を担い、魚群が見つかる灯火をともし、魚をおびき寄せるのだ。深い場所を泳ぐ魚に対しては水深約100mまで水中灯を下ろす。この作業には独特の感性と経験が必要だ。いよいよ網船の出番だ。灯船を



中心にぐるりとその周りを取り囲み、回りながら網を下ろしていく。直径約200mの円を海中に張り巡らせるのだ。そして、灯船が円の外に出た後、徐々に網を絞り魚の逃げ場を塞いでいく。



漁獲される魚／いわし、あじ、さば

漁場／県下全域の海域

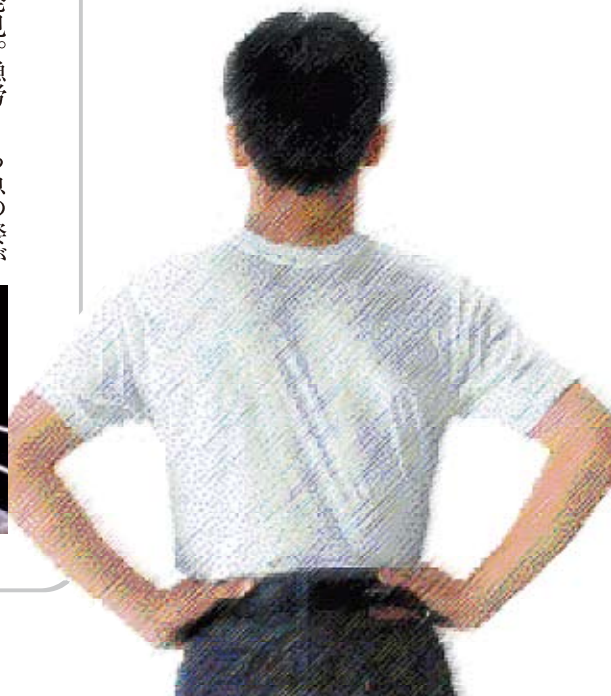
作業人数／漁船の大きさで規模が分かれています。15〜40人

さば
あじ
いわし

この一連の作業に要する時間は1時間半から2時間程度。漁場を変えながら一晩に1回から3回程度、同様の作業を行うのだ。多い日もなると漁獲量は400トンにもなる。こうして漁を終えた網船と灯船は出港へ帰り、運搬船は水揚げ港に向かう。

漁から帰り、ほっとするひととき。からだを休めたり、食事をしたり、思い思いの時間を過ごす。出漁する日は1年間で約200日。土曜日は休漁日というのが一般的だ。シケの日には休漁になることが多いので、自由な時間は結構ある。

大海原を舞台に練り広げられる自然とのドラマ。一度体験すると、その魅力の虜になる。



一日の平均作業例

(5月~9月期)



●本船・灯船 母港へ帰港開始
●運搬船 積荷を持って境港へ

運搬船へ

揚網・魚群探索

魚群探索

